令和７年度版「学力向上ポートフォリオ（学校版）」【大谷場東小学校】

⑥ 次年度への課題と学力向上策

知識・技能	・学力の二極化がみられるため、スクールダッシュボードを活用して個々の理解度を把握し、授業改善に生かしていく。また、引き続き本校の研修テーマである「個別最適な学び」に結び付けて取り組む。 ・用語と実際の現象や事象を関連付けるため、デジタルで動画や画像を提示するだけでなく、実物の観察などリアルな体験を組み合わせ、デジタルとリアルを効果的に統合した授業を展開する。 ・図や表、グラフなどから読み取れることを言葉で表現することに課題があるため、語彙力向上に向けて読書の機会を増やし、言語化する力を育てる。
思考・判断・表現	・協働的な学習を通して、間違いを恐れずに解答できる児童を育成しようと努めているが、発言が特定の児童に偏ってしまう場面もある。意図的指名や発表以外の表現方法の工夫、温かい人間関係づくりなどを通し、誰もが発言しやすい環境を整えることで、学級経営を含めた授業力の向上を図る。 ・問題の資料を基に選択肢から解答することはできているが、記述問題になると解答できない児童が多い。記述の仕方を身につける必要があるとともに、自分の考えを整理し、筋道を立てて表現する力が課題である。ICTを活用し、表現力を高める授業の充実を図る。

① 今年度の課題と学力向上策

	学習上・指導上の課題		学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> ・多くの児童が基礎的な知識・技能の定着を図れているが、二極化している。 <指導上の課題> ・児童の理解度を把握し、指導に生かしたり、個に応じた指導を展開したりする必要がある。	⇒	・本校の研修のテーマである「個別最適な学び」を実現するために校内で授業公開を行い、指導力の向上を目指す。【通年・全教員年間】 ・「スクールダッシュボード」を活用して、児童の理解度の把握に努め、次時の授業に生かす。【通年】 ・授業のあとで全エ夫し、学習の目標を児童が決められるように授業を展開する。【通年】
思考・判断・表現	<学習上の課題> ・児童は失敗を恐れる傾向があり、自分の考え・思いを表現することが苦手である。 <指導上の課題> ・デジタルとリアル両面のよさを生かして様々な表現方法の指導をしていく必要がある。	⇒	・評価の観点を明確に示し、児童が表現の仕方を見通しをもって進められるようにする。【通年】 ・様々な意見を受け入れられる雰囲気を作るために、互いに認め合える学級経営、授業経営を行う。【通年】 ・ICTを効果的に活用して、学習モデルや様々な表現方法を示すと共に、協働的な学習を進め、表現したいと思える課題を工夫する【通年】

⑤ 学力向上策の実施状況

	評価（※）	
知識・技能	A	「個別最適な学び」を実現するためにすべての教員が校内で授業公開を行うことができた。参観した教員が参観シートにより点、改善点等を記入し、職員室に掲示した。指導力向上のための様々な方策や指導法に触れることができた。また、校内でスクールダッシュボードの活用の研修を行い、活用の仕方を学んだ。教職員アンケート「スクールダッシュボードの活用」の項目で肯定的な回答が７０％となり、個々の児童理解を深めて、授業を展開する教職員を増やすことができた。また スクールダッシュボードだけでなく、ノートに振り返りを書かせて、次の授業に生かす教員も見られ、デジタルとリアルを使い分けて、個に応じた指導を意識的に行った。
思考・判断・表現	A	教職員アンケートによると、授業で評価の観点を示している教員は96%、ICTを活用して学習モデルや表現方法を示した授業は89%、表現したくなる課題の工夫は100%、協働的な学習への意識は92%が肯定的な回答であった。評価の観点を示すことで、児童は「どのように表現すればよいか」を考え、自分の思考を整理して表現に生かすことができたと考えられる。授業公開では、算数で問題文に線を引いたり、自分で振り返り問題を考えたりする学習活動や、協働的な学習を意識し、間違いを恐れずに解答しようとする姿を促す授業が多くみられた。

※評価　Ａ ８割以上（達成）　Ｂ ６割以上（おおむね達成）　Ｃ ６割未満（あ

② 全国学力・学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	すべての教科の正答率について、国や市の正答率の平均を大きく上回っている。国語の正答率は７割後半から８割となっている。算数については８割弱の正答率であるが、２（２）台形の意味や性質についての問題の正答率が５割強のため、図形、特に台形を構成する要素について習熟を図る必要がある。理科においては、２（１）身の回りの金属の電気を通す物、磁石に引き付けられる物があることの知識についての問題の正答率が低かった。観だけが有する磁石に引き付ける性質を理解できるように、日常生活で磁石を使って、様々な金属で試す機会があるとよいと考える。金属が電気を通さない と回答する児童も多かったため、電化製品で使われている金属について、授業で取り上げることも有効であると考える。
思考・判断・表現	全教科の正答率は、国・市の平均を上回ることができている。しかし、国語の１話すこと・聞くこと」に関する平均値の差はわずかであるため、課題と考える。１―の目的や意図に応じて、話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができるかどうかの問題で、話し手の意図を読み取る力に課題がある。また、３三（１）の目的に応じて必要な情報を見つけることができるかどうかの問題でも正答率が下がっており、必要な情報を整理して読み取る力にも課題がある。算数については、表現力・記述力や問題の意図を理解して答えるための読解力に課題がみられた。普段の授業から、問題の意図を読み取る力や答えを自分で表現したり、考えて記述したりする機会を増やしていきたい。

④ さいたま市学習状況調査結果について（分析・考察）

知識・技能	すべての学年・主要教科の平均正答率は、概ね市平均を上回り、基礎の定着が確認できる。 高学年では４教科で優位性があり、算数は「図形」「データの活用」などで高水準であった。一方、幅広を問うた実生の高出や図形構成の見取り、複合グラフの読み取りでは伸び悩む設問がみられる。理科は、知識の想起と観察結果の結び付けを意識した指導が有効と考える。また小４算数では、数き語の図から平行四辺形を見付ける、グラフの読み取りで選択が分散し、根拠確認の徹底が必要である。理科の基礎概念が低学年に低いため、用語と現象の対応付けに弱さ（例 電気→磁石、気体や溶解の基本） がみられる。算数のデータ・資料領域でミスが目立ち、表・グラフの精読に課題がある。そのため、理科では、事象に用語を結び付ける授業が有効であると考える。また、算数（資料領域）では、表・グラフから読み取れることを言葉に変換する学習が考えられる。
思考・判断・表現	全体として市平均は上回るが、目的把握→情報整理→根拠提示→表現のプロセス型課題では市との差が縮まる場面がある。国語は「話す・聞く・書く」において段落構成・理由付け・相手意識が弱い現状がみられる一方、資料活用の記述は学年によって二極化がみられる。算数は設問意図の読み取り→図表での整理→筋道立てた説明の精度が得点差に直結しており、図・表・言葉の三点セットで思考を可視化する授業が効果的と考える。算数の関係把握と求道状（割合・比の場面設定でつまずき）が課題である。 国語は概ね高位だが設問間でばらつき（資料の引用の仕方・段落構成などで差が出る）がある。そのため、主張・根拠・具体例・結論の順に、自分の考えを展開できるようにする。

③

	中間期報告		中間期見直し
	評価（※）	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	・校内の授業公開は、２学期から行う予定である。 ・スクールダッシュボードの活用については、教職員へのアンケートで肯定的な回答が４２％にとどまっている。使い方を知り、使いやすさを実感できるようにする必要がある。 ・学習の目標を児童が自己決定できるように、授業のめあてを工夫していると教職員は９６％に上った。引き続き、授業ののめあてを工夫して、個に応じた指導を行う。	・スクールダッシュボードの活用方法の研修を行い、身近に使いやすくする。【９月】
思考・判断・表現	A	・教職員アンケートによると、授業で評価の観点を示すことは８５％、ICTを活用して学習モデルや表現方法を示した授業については８８％、表現したくなる課題の工夫は９６％、協働的な学習への意識は全教員が肯定的な回答をしている。 ・児童が表現方法を載せリーフレットにしたり、ICTを活用してスライドを作ったりして発表していた。学年が上がるにつれ、表現方法の工夫がみられた。	・問題の意図を読み取れるように、授業の中で問題文を使読したり、答えの理由を考えさせたりする。【通年】

※評価　Ａ ８割以上（達成）　Ｂ ６割以上（おおむね達成）　Ｃ ６割未満（あ

令和6年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【大谷場東小学校】

⑥ 次年度への課題と授業改善策

知識・技能	引き続き、「個別最適な学び」の研修を続け、児童が課題解決へ自己決定する機会を多く取り入れるようにする。教師が、児童へ目標値を示すことで、意欲的に取り組む姿が今年度、多々見られた。児童が自分で目標値や学び方を決め、ゴールをイメージできるように支援を続けていく。
思考・判断・表現	自分の考えを多様な形で表現できるようにしていく。タブレットだけの表現に限らず、文章、図や絵、表やグラフ等、多様な方法で自分の考えを表せるように、児童が自分で表現方法を決められる機会を設けるようにする。また、難しそうな課題や長い文章等に対しても粘り強く取り組めるように支援をし、R7年度の全国学力・学習状況調査等で引き続き改善状況を検証していきたい。

① 今年度の課題と授業改善策

	学習上・指導上の課題		授業改善策【評価方法】
知識・技能	<学習上の課題> 全体的に、基礎的、基本的な知識・技能の定着が図れている。しかし、個人差が大きく、２極化する傾向がある。 <指導上の課題> 児童自らが、学習を振り返る機会があまり設けられていない。	⇒	「個別最適な学び」を研修のテーマとし、授業を改善している。学習が得意な児童は、さらに学力が向上するように、苦手な児童は、「わかる喜び」を感じることができるようにしていく。そのためにも、児童の学習状況を把握し、個に応じた習熟別学習を行う。
思考・判断・表現	<学習上の課題> 意欲的に学習に臨んでいる児童は多いものの、国語の学習では、文章を記述する問題で無回答が目立つ。 <指導上の課題> 児童が多様な表現ができるように、工夫した授業を行うことが必要である。	⇒	児童が、文章を記述したり、作品を制作したりする際は、事前に評価の観点を示し、児童が表現の仕方の見通しをもって臨めるように指導をする。また、児童には様々な作品の例を示し、多様な表現方法を知る機会を設ける。

⑤ 授業改善策の達成状況

	評価(※)	
知識・技能	A	「個別最適な学び」についての職員研修を通して理解が深まり、授業に取り入れられるようになった。その際、児童が課題解決に向けての取組を自己決定できるように促した。それにより、個に応じた支援がしやすくなった。単元ごとの振り返りの時間を設け、児童の授業の理解度が高まった様子が見受けられた。
思考・判断・表現	A	児童が文章を記述したり作品を制作したりする際に、評価となるポイントを示した。そのポイントがあることで、児童が見通しをもって意欲的に取り組むようになった。 また、中間発表会を設けたり、友達のものを気軽に見に行く機会を設けたりすることで思考が深まり、更によりよくしようと挑戦する児童が増えた。

※評価　Ａ 8割以上(達成) Ｂ 6割以上(概ね達成) Ｃ 6割未満(あと一歩)

② 全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)

知識・技能	国語の(2)情報の扱い方に関する事項では、9割以上の正答率であった。(1)言葉の特徴や使い方に関する事項では、平均よりは上ではあるものの、差は大きくないため、さらに伸ばすことが課題である。 算数においても平均を上回ることができた。しかし、円グラフの特徴を理解し、割合を読みとる問題において、平均を若干下回り、無回答率も高かったため、データの活用問題では、課題がある。
思考・判断・表現	全国平均を上回ることができている。しかし、B書くことの記述式の問題において、平均値とあまり変わらない結果であった。特に、人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりする力を高めることが課題である。 算数でも、すべての項目で平均を上回ることができている。しかし、記述式の問題において無回答率が高いものもあり、課題がある。

④ さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)

知識・技能	どの学年においても市の平均値を超えており、基礎的・基本的な知識・技能の定着は図れている。高学年の理科においては、市平均と近い数値となっている。科学的な言葉や概念の理解や、正しい観察の仕方の理解においてさらに知識・技能を高めていく
思考・判断・表現	無回答率が減少しており、自分の考えを表そうとする意識の向上が見られる。高学年の社会科の思考・判断・表現の問題区分では、平均を大きく超えることができていた。中学年の算数のデータ活用については課題がある。グラフ等の資料から情報を読みとる力をつけていくことを今後高めていきたい。

③

	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	授業改善策の達成状況	授業改善策【評価方法】
知識・技能	A	「個別最適な学び」を研修のテーマとして各教員が取り組んでいる。タブレットを活用し、自分の目標に合った学習を選択し、取り組んでいる姿が見られる。	変更なし
思考・判断・表現	A	タブレットに表す、ノートに書くなど多様な表現方法を示し、授業を行っている。活動の前に評価を示し、児童が目標を自分で決める姿も見られる。	国語、算数の教科において、記述式の問題に課題がある。授業の中で、自分の意見や感想を多様な表現方法で表す時間をさらに設定する。

※評価　Ａ 8割以上(達成) Ｂ 6割以上(概ね達成) Ｃ 6割未満(あと一歩)